

色のおいの感じ方に及ぼす影響 - 性差について -

牛腸ヒロミ* 高木史恵* 板倉正弥** ○勢畑章子** 小見山二郎**

(*聖徳栄養短大 **実践女大)

【目的】牛腸らの直前の報告と同じ方法で、20歳台の男子を対象として、赤、黄、緑、青、白の5色の液体に付与した11のおいについて、SD法で官能検査を行ない、因子分析法で解析した。前報の女性についての結果と比較して、色の影響を受けているにおいの感じ方の男女差を明らかにする。

【実験】前報と同様に調製したサンプルを主として化学系の20才台の男子学生50名に臭いでもらい、においの感じと指定してSD法で申告させた。結果を因子分析法で解析して、女子についての結果と比較した。

【結果】(1)男女ともに12因子まで抽出されたが、男子は第1因子(快/不快)、第2因子(主として色)の寄与率が大きく第4因子以降の寄与は極めて小さかった。男子の感じ方は少し単純である。(2)第1因子に対する色の影響を、男女とも前報と同様に3つに分類することができたが、男子では快/不快の逆転するにおいは少なかった。(3)あるにおいが快であるか、不快であるかの男女の感じ方は、色が白の場合すべてのにおいで一致したが、他の色では男女間に違いがあった。各々の色について、第1因子に寄与率の高い形容詞対を拾い上げると、男子はそれぞれの色についての感じに加えて、“女性的”の感じ方が共通してみられた。男子は白以外の色を女性的と感じるため、色の影響を受けたにおいの感じ方に違いが生じると考えた。(4)第2因子では男女で各色の感じ方が逆転することが多い。このことも、女性は色についての感じ方が無性的であるのに対し、男性は色と女性を結び付けて感じていることによると思われる。